2018年05月07日 3面

文字サイズ 小 中 大 ブックマーク 印刷

長大／比・ミンダナオの地域開発が次のステージへ／初の基礎インフラ案件完成

竣工式であいさつする永冶社長

６月から通水が始まる取水堰

長大がフィリピン・ミンダナオ島のブトゥアン市で現地企業と共同で進めていた「アシガ川小水力発電所」（発電容量８メガワット）とタギボ川上流部の「上水供給施設」が完成した。市の経済発展を支えるため、同社が計画する地域開発プロジェクトに連動した基礎インフラ整備事業で、初の完成案件となる。　＝１面参照

４月３０日に現地で行われた竣工式には、同社と共同で事業を行うミンダナオ島の大手ゼネコン・エクイパルコ（ルーベン・ジャビエール最高経営責任者〈ＣＥＯ〉）、現地企業のツインピーク（高野元秀社長）をはじめ、ブトゥアン市のロニー・ラグナダ市長、同社の永冶泰司社長、山脇正史取締役兼専務執行役員、井戸昭典取締役兼常務執行役員、基礎地盤コンサルタンツ（東京都江東区）の岩崎公俊社長ら１００人以上が出席した。

アシガ川小水力発電所の式典の席上、永冶社長は「この発電所による電力供給がミンダナオ島、さらにフィリピンの経済発展に寄与すると信じている。皆さんと歩みをともにして今後の安定した運営に努める」とあいさつ。上水供給施設の式典で山脇取締役は「基礎インフラの整備で点から線、面のつながりをつくり、地域を豊かにするさまざまな事業を展開するサービスプロバイダーとして力を発揮したい」と決意を述べた。

アシガ小水力発電事業は、２０１２年５月に同社とエクイパルコ、地元のハイドロリソース、ツインピークの４社が特別目的会社（ＳＰＣ）「アシガ・グリーン・エナジー」を設立し、同年１２月に着工。同社が取水堰（高さ約１５メートル、幅約１００メートル）や発電所までの導水路（延長３・５キロ）、発電所建屋、富士・フォイトハイドロ社製横軸フランシス型水車による発電機の据え付けなどの施工監理といった業務を担当した。今後はＳＰＣを通じて運営する。同社は今回の事業のほかに、タギボ川小水力発電所（事業費約２１億円）とワワ川小水力発電所（約１１２億円）を３社共同で整備する。

一方の上水供給事業はブトゥアン市水道公社に代わって、水供給事業を運営するＳＰＣ「タギボ・アクアテック・ソリューションズ」が新規の設備投資と維持管理を担当するＰＰＰ事業。長大は１５年３月、タギボの大株主であるエクイパルコからタギボの発行済み株式５％を取得し、事業に参画した。

ＳＰＣは１日当たり３万トンの上水を供給するための取水堰（高さ約１３メートル、幅約６０メートル）や浄化設備を整備し、２５年間にわたっての運用を担当。工業団地整備による産業誘致で水需要が増えるとみて、１日当たり８万トンの水を供給するための増強工事も今冬から開始する。

記事ID：3201805070303

Copyright(C) 日刊建設工業新聞 記事の無断転用を禁じます